

牛車

三遊亭円朝

青空文庫

このたび 此度 英照皇太后陛下の御大喪に就きましては、日
 本國中の人民は何社でも、總代として一名づゝ御拝觀
 のために京都へ出す事に相成りました。処で数なりません落
 語家社会でも、三遊社の頭取 円生と円遊の申しまする
 には、仮令落語家社会でも、何うか總代として一名は京都
 へ上せまして、御車を拝ませたいものでござりますが、扱どう
 も困る事には、是まで十五日間の謹みで長休みをいたして居り
 ました処へ、御停止あけとなつて、又休んで京都まで参らう
 といふものは一人もありませんで、誠に困りましたが、幸師匠
 はマア寄席へもお出なさいませぬ閑人でいらつしやる事ではす

から、御苦勞ながら三遊社の総代として、貴方京都へ行つて
 下さる訳には参りませんか、円朝が頼まれました。元より此
 のたびの御大喪は、是迄にない事でございますから、何うかし
 て拝したいと存じて居りました処へ、円生と円遊に頼まれ
 ました事故、腹の中では其実僥倖で、そんならば私が皆なの
 総代として京都へ往きませうと受合ひました。
 夫から徐々京都へ参る支度をして居ります中に、新聞で見
 ましても、人の噂を聞きましたも、西京の旅籠屋は客が山を
 為して、ミツシリ爪も立たないほどだといふ事でございますから、
 此奴は迂かり京都まで往つて、萬一宿がないと困ると思ひま
 して、京都の三条白河橋に懇意な者がございますから、其

人ひとの処ところへ郵便を出して、私わたしが参まゐるから何なにうか泊とめて下くださいと申まう
 して遣やりますると、其その返事へんじが参まゐりました。「拜はい啓けい益ます々く御ごさう
 壯健けん奉けい慶が賀た候てまつり、随きつて貴君きくん御来京ごらいきやうの趣おもむきに御座候得共ござさくらえども
 、実じつは御存ごぞんじの通り御大喪ごたいさうにて、当地たうちは普通たうちの家いへにても参さん列れ
 者つしやのためつしやに塞ふさがり、弊屋へいをくも宿しゆく所しよに充あてられ、殊ことに夜よるのも
 の等とうも之これなく、甚はなはだ困をり居をり候を折さからゆゑ、誠まことに残念げんげんには
 御座候得共ござさくらえども、右様みぎやうの次第しだいに付き悪あしからず御推察ごすゐさつなし被くだされ下
 度たく候さくらふ、匆々さうく「といふ返事まゐが参まゐりました。私わたしも少し驚おどろきまし
 て、此この分ぶんでは迎とても往ゆく事ことは出来できまいと困をりましたから、私わたしが日ひ
 頃ごころ御ご臆ひいきに預あづかりまする貴顯きけんのお方かたの処ところへ参まゐりまして、右みぎのお話わ
 をいたしますると、そんならば幸私さいわひも往ゆくから、連つれて往いつて遣や

ると仰おつしやいました。誠に有ありがた難い事ことで、私わたしもホツと息いきを吐ついて、それから二日かの一番ばん汽車きしやで京都きやうとへ御ご随ず行るをいたして木屋町きやちやうの吉富楼よしとみろうといふ家うちへ参まゐりました、先方せんぽうでは貴顕きけんのお客きやく様さまですから丁寧ていねいの取とり扱あつひでございましてお上かみの方かたはお二階にかい或ひは奥座敷おくざしきといふので私わたしは次の室まのお荷物にものの中の少々せうくばかりの明地あきちへ寐ねかして頂いたく事ことに相あひなりました。

扱さてむいか
扱さてむいかには泉山せんざんといふ処ところへお出掛でかけになるに就ついて、私わたしもお供ともをいたし四條通りしでうどほから五條を渡わたり、松原通りまつばらどほから泉山せんざんに参まゐりまするには、予かねて話わに聞きいて居をりました、夢ゆめの浮橋うきはしといふのを渡わたりました、二三町参ちやまゐつて総門そうもんを這入はいり夫それから爪先つまさき上あがりに上あがつて参まゐりますると、少ひろし広とい処ところがございまして、其処そこに新築しんちく

になりました、十四五間けんもある建家たていへがございました。是これは此この
 時のお掛かりの方かた々々のお話つめしよ所と見えまして、此所こゝで御拜ぎよはいが
 あるといふことを承うけたまはりました。實じつに此度このたびの大喪たいさうしちやうくわ使長
んさま
 官様といふのは、夜よるもトロく睡まどろみたまふ事もございません
 といふ、大層たいそう御丁寧ごていねいに仰おつしやいますから、私わたくしどもには些ちと舌
 が廻まはらなくつて云いひにくいくらゐで、御参列ごさんれつのお役やく人にんも此この
ところごさんばい
 処こゝで御参拜ごさんばいがあるとそれいふ事で、夫それを思ふと私わたくし共どもは有難ありがたい
 事ことで、お供ともをいたして参まゐりましても毎日々々旨うまい物ものを御馳走ごちそうにな
ひる
 つて、昼も風が吹くと外へ出られんといふので、炬燵こたつの中で首くび
はい
 たけ這入はいつて当たうじつ日ひまで待まつて居をるのでございませぬから此このくらゐ
けつこう
 結構けつこうな事はまたをりございませぬ。又折々またをりは其そのお方かたのお供ともをいたし

て、大坂おほさかで有名いうめいな藤田ふぢたさま様の御別荘ごべつさうへ参まゐりまして、お座敷ざしきを拜見はいけんしたり、御懐石ごくわいせきを頂戴ちやうだいした跡あとで薄茶うすちやを頂戴いたゞして、誠に此上このうへもない結構けつこうな事ことでございませう。丁度ちやうど七日かの御当日ごたうじつは往來わうらいど止めになるだらうと聞ききましたから、昼飯ひるめしを食たべて支度したくをいたし、午後二時ごごごろから宿やどを出でましたが、其処そこまでは人力車くるまで行ゆかれる処ところで、参まゐりました処ところは堺さか町ちやうめい三条北さんじょうきたに入る町まちといふ、大層たいそう六むづかしい町ちやうめい名なでございまして、里見忠さとみちゆう三郎さぶらうといふ此頃このごろ新築しんちくをした立派りつぱな家うちで、此処こゝは御案内ごあんないの通とほり古器物骨董こきぶつ書画類しよゑるゐを商あきふ方なかで中々なか面白おもしい人ひとでございませう。何どうも諸方しよはうから頼たのまれたと見みえまして、大分だいぶんに宜よいお客様きゃくさまもございませう。

西さい京きやう大坂おほさかの芸妓げいこも参まゐつて居をりましたが、皆みな

まるまげ 丸鬻で黒縮緬くろちりめんの羽織はおりへ一寸黒紗ちよつとくろしやの切れを縫ぬひつけて居をり
 まして、其その様やうす子は奥様然おくさまぜんとした拵こしらへで、皆みな其そ処こに寄より集あま
 つてお通とほりの時刻じこくを待まつて居をりますので、其その中うちに五ごもく鯨ずしが出い
 たり種しゆ々／＼御馳走ごちそうが出でます中うちにチヨンくと拍子木ひやうしぎを打うつて
 参まゐりました。何なんだらうと思おもつて直すぐに飛出とびだして格子かうしを明あけて見みます
 ると、両りやう側がは共ともに黒木綿くろもめんの金かな巾きんの二ふた一は巾ぐらゐ位ゐもありませう
 か幕張まくはりがいたしてございまして、真黒まつくろで丸まるで芝居しばゐの怪談くわいだん
 のやうでございます。処ところへ大きな丈たけ三尺しやくもある白張しらはりの提灯ちやうちん
 が吊つるさがつて居をります、其その提灯ちやうちんの割わりには蠟燭ろうそくが細ほそうござい
 ますからボンヤリして、何どうも薄気味うすきみの悪わるいくらゐる何なんか陰々いんくと
 して居をります。軒下のきしたに繩張なはばりがいたしてございます此この中うちに拝は

いくわんにん
 観人は皆立て拝しますので、京都は東京と違つて人氣
 は誠に穩やかでございまして、巡查のいふ事を能く守り、中
 々繩の外へは出ません。一尺ぐらゐる跡に退つて待つて居る様子、
 それが東京の人だと「何をしやアがる、押しやアがるな、モ
 ツと其方へ寄りやアがれ。なんかと突倒して、繩から外へ飛出
 し巡查に摘み込まれる位の事がございしますが、西京は誠に
 優しい、「押しなはんな、アの様な事いうてや、押しなはんな、
 何いうてゐやはります。なぞと誠におとなしい夫故押される憂
 ひはございしません、けれども軒の下にはギツシリ爪も立たんほど
 立つて居ります。

其の中に追々お通りになります、向うに列んで居りますは、

このゑへい まう 近衛兵と申す事でございませが、私どもには解りませんが、兵
 隊 せいれつ さんが整列して居ります。指図役のお方でございませが、
 馬 ばじよう 乗で令 れい を下 くだ して居 を られます。四ツ辻の処 つじ に点 ち つて居 を りました
 電 でん 氣 き 燈 とう が、段 だん 々 く 明 あ るく あ くなつて来 く ると、従 したが が つて 日 ひ は西 かたむ に傾 かたむ き
 ましたやうでございませ。其 そのうち 中 また に又 ひやうしぎ 拍 ひ 子 し 木 ぎ を、二 に ツ打 うち 三 さん ツ
 打 うち 四 し ツ打 うち つやうになつて来 く ると、四 し ツ辻 つじ の樂 がく 隊 たい が喇 ら 叭 ぱ に連 つ れ
 て段 だん 々 く 近 きこ く聞 き えます。兵 へい 士 し の軍 ぐん 樂 がく を奏 そう しますのは勇 いさ ましい
 ものでございませが、此 こ の時 とき は陰 いん 々 く とし居 を りまして、靴 くつ の音 おと
 もしないやうにお歩 ある 行 き なさる事 こと で、是 これ はどうも歩 ある 行 き 悪 にく い事 こと で、
 誠 しん に静 しづ まり返 かへ つて兵 へい 士 し ばかりでは無 な い馬 ば までも静 しづ かにしなけれ
 ばい ま かないと申 まう す処 ところ が、馬 ば は畜 ちく 生 しやう の事 こと で誠 しん に心 こころ ない物 もの でございませ

すから、焦つたがり、駈出したり或は跡、足でバタ／＼やるやう
 な事もございました。其の中にどうも兵士の通る事は千人だか数
 ずかぎ限りなく、又音楽が聞えますると松火を点けて参りますが、
 松火をモウ些欲しいと存じましたが、どうもトツプリ日が暮れ
 て来る、電気は四ツ角に点いて居りますのだから幽かに此方へ映
 りまする、松火は所々にあるのでございますからハツキリと
 は見えませんが、何でも旗が二十本ばかり参つたと思ひました。
 皆白錦の御旗でございます。剣の様なものも幾らも参りまし
 ました。其の中に御車を曳出して参りまするを見ますると、皆京
 都の人は柏手を打ちながら涙を翻して居りました。処へ風を
 冒いた人が常磐津を語るやうな声でオー／＼といひますから、何

だかと思つて側そばの人に聞きましたら、彼あれは泣なき車ぐるまといつて御み
 車くるまの軌きしる音おとだ、と仰おつしやいましたが、随ず分ぶん陰いん気きな物ものでござい
 ます。其その御み車くるまに四頭よの牛うしがついて居をります。此この牛うしは蓮れん華げ班まだら
 といひ、替か牛へうしが位ゐ牌はい班まだらといふのがあり、天あ簾ますだれといふ牛うしが
 ある。どうも能よくさういふ毛け並なみの牛うしが出来できたものでございますが、
 牛うし飼かひさんたつに尋たづねると然さういふ牛うしは其その時ときに生うままれて出いると云いひま
 した、と京きやう都との人ひとが申まうした。御み車くるまの前まへに糞ふんをするといかん
 といふので、黒くろ胡ご麻まを食くべふんさせて糞ふんの出いないやうにするといふ、
 牛うしも骨ほねの折おれる事ことでございませう。毎まい日にち々々食たべつ附つけない黒くろ胡ご麻まを
 食たべて糞ふん詰づまりになるから牛うしが加か減げんが悪わるくなつて、御ご所しよ内ないの主と
 のものれううしごや殿どの寮れうに牛うし小こ屋やがありまして、其その中なかに寐ねて居をりますと、牛うしの仲な

間みまひが見舞まるに参まゐりました、といふお話はなしを考かんへました、是これは昔むかし風うの獸物けものが口くちを利きくといふお話はなの筋すぢでござごいます。

多くの黒牛くろろうしと白牛しろろうしが這入はいつて来きまして、「御免ごめんなさい。「ハ

イ。「扱さて」扱さてにどうもモウ此このたび度は御苦勞ごくろうさま様さまのことことでござごいます、
実じつに何どうも云いひやうのない貴方あなたは冥加みやうがしごく至極しごくのお身みの上うへでげすな。

「へエ有あり難がたうござごいます。「マア斯かういふ事は滅多めつたにない事ことで

ござごいます、我々われ々のやうな牛うしは実じつに骨ほねの折よれる事こと一通りひとつとほでは

ありませなせん、女牛めうしの乳ちを絞しぼられる時ときの痛いたさといふのは耐たりませなせん

な、夫それにまア私わたしどもどもの小牛こうし等らは腹はらの毛けをむしらられて、八重やへ縦たて十

文字もんじに疵きずを付つけられて、種痘瘡うゑぼうさうをされ布ぬので巻まかれて、其その痒かゆい

事ことは一通りひとつとほではありませなせん、夫それに私共わたしどもは先年せんねん戦争せんさうの時ときなど

は、支那の恐ろしい道の悪い処へ行きまして木石を積んで運び
 ますのが、中々骨の折れた事で容易ではございません、勿論牛
 は力のあるのが性質故、詰りは国の為めだから仕方がござい
 ませんが、それに引換へて貴方は結構でございますねエ。「へ
 エ。「同じ牛でもどうも、五位の位が附いたといふ事を聞きました
 たが全たくでございますか。「へエ……そんなに賞めてお呉んな
 さるな、畜生の身の上で位など貰ひましたから、果報焼け
 で、此様な塩梅に身体が悪くなつて、牛のくらの倒れとは此
 事で、毎日々々黒胡麻ばかり食はせられて、食べ附ない旨い物
 だからつい食べ過ぎてすつかり通じが留りましたので、逆せて目
 が悪くなつて、誠にどうも向うが見えませんが狭い通りへ行つ

て、はいくわんにん 観人なかの中へでも曳ひき込こむやうな事ことがあつて、怪我けがでも
 させると大たい変へんだと思つて今いまから心配しんぱいでございませう、モウ明みやうに
 日ちになりました……夫それに私わたしの名なが貴方あなた、どうも蓮華班れんげまだらといふ
 のでげすからな、おまけに夢ゆめの浮橋うきはしを渡わたるといふので替かへうし牛うしが
 お前まへさん、位牌班ゐはいまだらといふので名なが一体たいに訝おかしうございませう、私わたし
 もモウ明みやうにちやく 日ひ役に立たてば宜ようございませう、今こんばん晩ばんにもヒヨツ
 と生者しやうじやくひつめつ必滅ひつめつでございませう……。「然そんな氣きの弱じやくい事ことをい
 つちやア行いけません、お加減かげんが悪わるければ、明みやうにち 日ひは御大役ごたいやくの
 事ことですから早く牛の角文字つのもじにでも見みせたら宜よしうございませう……。
 牛の角文字つのもじといふのは、隠かくし題だいの歌うたに「二ツ文字牛の角文字直ちよくな
 文字もじゆがみ文字もじとぞ君きみは覚おぼゆれ」是これは恋こひしくといふ隠かくし題だいの歌うたで、

二ツ文字はこの字で、牛の角文字は、いろはのいの字、直な文字はしの字で、ゆがみ文字はくの字でございませぬ、夫れですから牛の角文字といふのは貴方医をお頼みになつたら何うでございませぬといふので。「夫は僕も家畜病院長を呼んで診察をして貰ひましたがな……。」「お熱は何んな塩梅でございませぬか。「熱は京都へ来たせいかな平をんでげす。「熱度はどの位で。「三条七条と申ませぬ。「成ほど、夫ぢやア、マア大したお熱ぢやアないお脈の方は。「脈の方が多うございませぬ、九条から一条二条に出越す位な事だ。「成ほど、脈の方が多うございませぬ、脈の割にすると熱が陰にこもつて居りますな。「モウ、私は迎も助かるまいと思ひませぬ。「然な事を仰しやつちやアいけませんよ、

どうか確しつかりなさい。「熱ねつがモウ少し浮うかないでは直なりますまいよ。「御心配なさいますな、明みやう日にちはキツと御発カんでござい
ます。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

※表題は底本では、「牛車《うしぐるま》」となっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年7月19日作成

2014年5月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

牛車

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>